

彙 報

本会記事

西南アジア研究会総会

2001年度総会は、先の会告のごとく、2001年12月8日午後2時から、京都大学文学研究科・文学部新館第4講義室において開催された。

小野山節会長の開会の挨拶に続いて、前川和也氏を議長に選出し、議事に入った。まず久保一之委員と近藤真美委員から、会誌発行状況、会員数、会計等の会務についての報告が行われ、ついで、会計業務について、総会開催以前に堀川徹監事（当日は欠席）の監査を受け承認されている旨報告された。その後、会誌発行に関わる雑務や会員数の減少等について話し合われた。

また本年度は役員改選の年にあたり、間野英二副会長が新会長に、前川和也委員が新副会長に選出された。続いて新会長の委嘱により、つぎの新役員表に掲げる通り、編集委員および監事が決定した。

会 長	間野 英二					
副 会 長	前川 和也					
編集委員	稲葉 穂	桑山 正進	久保 一之	近藤 真美	新谷 英治	
	杉山 正明	徳永 宗雄	真下 裕之	吉田 和彦		
監 事	堀川 徹					

総会議事後、関西大学文学部教授新谷英治氏に「『キターブ・バフリエ』の地中海——写本研究と現地調査から——」と題してご講演いただき、最後に間野英二副会長の閉会の挨拶をもって終了した。

会費納入のお願い

本誌第55号発送時に2001年度会費（第55～56号相当分）および滞納金をご請求申し上げたところ、多くの方からご協力が得られました。誠に有難く存じ上げます。

しかしながら、いまだご入金いただけていない会員の方も、少なくありません。第55号発送時にご通知した、会費納入状況をご確認の上、早々にお支払いいただけるようお願い申し上げます。

『西南アジア研究』投稿規定

I 投稿先 西南アジア研究会 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部内

II 原稿

- 1 手書きの場合は200字詰原稿用紙、パソコン・ワープロの場合は任意の用紙に横書きのこと。ただしパソコン・ワープロを利用した場合は、原稿の全内容が入ったフロッピー（テキスト形式のファイルが望ましい）を添付すること。
- 2 論文は注を含め200字詰原稿用紙80枚程度、研究ノート・研究動向は20枚～60枚とする。
- 3 論文等すべて1号限りで完結するものとし、連載はしない。
- 4 採否は編集委員会が決定し、手直しを求めることもある。
- 5 原稿は返却しない。ただし図については、投稿時に申し入れがあれば返却する。
- 6 投稿者は本誌の体裁にしたがい、以下の書き方に統一すること。
 - a. 第1頁に表題・氏名、第2頁にその英訳、第3頁以下を本文とし、注・文献表を含めて通し頁をうつ。
 - b. 章はローマ数字、節はアラビア数字（算用数字）で示す。ただし章節の表題の有無は自由である。
 - c. 注は別紙おこしとし、本文の後ろにつける。注の書き方は次のとおりとする。
 - 1) この場合、帝王の叙任は……
どちらもいえない。
 - d. 頁のみの引用はしない。参考文献の場合は[Fussman 1978: 94-98]、資料の場合は[HS: 25]として本文中に入れる。なお94-98, 25などは引用頁である。
 - e. dによって生じる文献表をつくり、別紙おこしで注の後ろにつける。筆者姓ABC順とし、欧文、和文、中文を混記する。中文は拼音による。書式は、下のIVのとおり。
 - f. 雑誌などの略号は本誌の表紙うらの方式にしたがうこと。単行本・雑誌は、欧文ではイタリック指示、和・中文では『 』に入れ、論文表題は括弧をつけず、裸のままにする。巻数は算用数字とし、号数は（ ）に入れて、3(1), 4(3-4) [3, 4号合併号の場合]などとする。Vol., Partなどの表示はしない。なおロシア文字はイタリックを用いない。
- 7 以上により、文字原稿は、表題・氏名、英文表題・氏名、本文・注、文献表より成る。

III 図の原稿

- 1 本誌ではアート紙・折り込み図表は使わない。
- 2 したがって版面13×20cmを考慮すること。
- 3 図はそれぞれ別紙に作成し、通し番号をつけ、各図の天地を明確にすること。
- 4 たとえば図3などが複数の写真などで構成されるときは、版面に入るよう考慮のうえ、出来上り図を作成すること。個々の図は、図1からの通し番号とする。
- 5 図の説明文（キャプション）は図に記入せず、B5版200字詰原稿用紙に書き、他の文字原稿の末尾につけておくこと。
- 6 本文原稿に図の挿入箇所を明示すること。原稿頁の右下に「図2挿入」などと朱書し、出来上りの面積（ $\frac{2}{3}5 \times \frac{2}{3}8$ cm）、頁における位置（上下左右など）を指示すること。
- 7 そのままで版下になる図をつくること。場合によっては、別途に経費を申しうけることがある。

IV 文献表の書き方

参考文献

IB:

DAI: (引用の一次史料の略号, および表紙裏に記載していない雑誌などの略号をアルファ

GAR: ベット順に配列し, コロンに続いてフルタイトル表記)

Tr. Id.:

Ackemann, H. Ch. (1975) *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London: Catalogue and Attempt at a Stylistic History*. Rome.

Allchin, F. R. (1968) Archaeology and the Date of Kanishka: The Taxila Evidence. In: Basham, A. L. (ed) *Papers on the Date of Kanishka*. Leiden, 4-34.

Bühler, G. (1894) The Bhattiprolu Inscriptions. *Epigraphia Indica* 2, 323-329.

Burgess, J. (1970) *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882* (rep ed). Varanasi.

Errington, E. (1987) Tahkal: The Nineteenth-Century Record of Two Lost Gandhara Sites. *BSOAS* 50(2), 301-324.

Gelder, J. M. van(tr) (1963) *Mānava Śrautasūtra Belonging to the Maitrāyaṇī Samhitā* (1985 rep ed). Varanasi.

Kurita, I. (1988) *Gandharan Art I: The Buddha's Life Story. Ancient Buddhist Art Series I-II*. Tokyo.

Kuwayama, Sh. (1994) The Horizon of Begram III and Beyond: A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kapiśi-Kabul-Ghazni Region. *EW* 41 (1-4), 79-120.

Le Berre, M. & D. Schlumberger (1964) Observations sur les remparts de Bactres. *Monuments pré-Islamique d'Afghanistan. MDFAFA* 19, 61-105.

Marshall, J. (1914) Sha-ji-ki-Dheri. *Annual Report of the Director-General of Archaeology, Archaeological Survey of India 1, 1911-12*. Calcutta, 11.

Marshall, J. (1918) *A Guide to Taxila*. Calcutta.

Marshall, J. (1936) *A Guide to Taxila* (3rd ed). Delhi.

Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account Archaeological Excavations I-III*. Cambridge.

Marshall, J., A. Foucher & N. G. Majumdar (1940) *The Monument of Sāñchi I-III*. Delhi.

安藤志朗 (1985) ティムール朝 Shāh Rukh 麾下の中核 amir 『東洋史研究』43(4), 4-11.

桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(訳注) (『大乘佛典』中国篇9) 林檎社.

佐藤 長 (1979) 『チベット歴史地理研究』岩波書店.

曾 問吾 (野見山温訳) (1945) 『支那西域経綸史』上 東光書林.

田原 正 (1978) 六朝建築の設計規準 山本五郎(編)『中國科學史研究』平凡社, 39-66.